西洋耽溺交流（上）

※体験版※

そう言ってベルゼブブは、沈んでいた原因である一枚の用紙を突きつけた。
一片の用紙を面倒くさそうに受け取り、内容に目を通すが、なんということはない文面だった。

「ふんふん、ジャパンのお偉いさんがまた訪問に来やがるんですねー。こちら側の悪魔の生態と性質を知るべく・・・なんスかね、僕らの事調べて、あんなちっちぇー国がなーにしようと企んでるんでしょうね、何千年たっても、極東の民族の考えなんて愚かしいっつーか、なんつーか、本気で勝てる気なんですかね？」

「いや・・・ケンカとかじゃなくて、純粋に私たちの事を知りたいみたいだぞ。政治云々関係なしに、ヤツはそういうところあるからな」

「はーん？ヤツ？来られる人の目星はついてるんですか？」

「ヤツだ・・・あの閻魔大王の補佐官・・・目が凄く怖い・・・会ったら会っただけダメージが増えていく、アイツだ・・・」

「あー、よくベル様がグチグチ文句垂れてるヤツですか？うーん、僕もなんとなく苦手。なんか性格が真逆ってカンジで、なに？ジャパンの諺で「シリが合わない？」」

「ソリだ！ソリ！おまえわざと間違えてるだろ！」

「いやー、ははははHAHAHA」

激高するベルゼブブと、頭に花が咲いたように笑う一方とは温度差が極端に違う。
自分に全く関係がなさそうに笑う男にベルゼブブはさらに怒りを募らせ、ギリギリと歯を鳴らす。
そこで、ふとベルゼブブの歯ぎしりが止まった。
目が突然輝き、嫌らしい笑みを浮かべると、相手に向かって言い放った。

「お前。今回ヤツの接待しろ」

「はあ！？なんで僕がそんなことをしなきゃならないんですか！？」

ただその場に居合わせたというだけで、とんでもない役目を押し付けられそうになり、悪魔は抗当然議する。

「リリス様と仲がいいらしいじゃないですか！嫁として、リリス様に案内させりゃいーじゃないんですかぁ！？」

厄介ごとと面倒なことを押し付けられるのが大嫌いな彼は、ベルゼブブの逆鱗に触れるようなことを当たり前かのようにまくしたてる。

「一人の男にリリスを預けられるわけないだろう！何かあったらどうするんだ！」

いや何かあってもあのお嬢なら大喜びでしょうが、と言葉を返そうとしたが、異常な速さでベルゼブブが机の上の書類になにごとかを書きなぐっているのを見て、嫌な予感を感じた。
できあがった書面を見せつけ、ベルゼブブが言葉を投げかける。

「ほら、指令だ！「ジャパン地獄の客人を接待すること」を任命する！」

「はあああああ！？」

とんでもない命令を受け、当然抗議を込めた声で大仰にわめいて見せる。

「ふふふ、俺のほうが官位は上なのだ！この命令に逆らったら、サタンさまに何かしらしてもらうぞ！」

むりやり文章をおしつけ、ベルゼブブは不敵に笑う。実はそのサタンですら、日本地獄に訪れた際に鬼灯から恐怖の仕打ちを受けて、舞い戻ってきた過去があるのだが・・・

「うぐぅぅ、なんという職権乱用・・・地獄に落ちやがれです・・・特別手当は弾んでもらいますよ・・・」

明らかに顔をゆがめて、受け取った紙面を引きちぎりそうに握りしめる。

「それと、ものは試しなんだが・・・」

「まだなにかありやがるんですか？」

少し言いよどむベルゼブブに嫌そうな顔を向け、悪魔は紙面をヒラヒラと団扇代わりに振る。

「・・・お前の力で、ヤツを懐柔できないか・・・と思ってるんだか・・・」

「ええ！？僕の手練手管で！・・・・・いや、あの人僕の好みじゃないです・・・」

「好みとかじゃなくて、もう、命令だ！お前が嫌なら部下になんとかさせろ！日本の鬼神一人、色欲の悪魔が堕落させられなくてどうするんだ！」

「えー・・・・やだなあ・・・」

色欲の悪魔と呼ばれた彼は、肩を落として眉を垂れさせる。

「あの方、すぐ暴力に訴えそうでヤなんですよね～。僕、暴力も騒ぐ人も嫌いですし・・・」

「なんだ、自信がないのか？」

言いよどむ悪魔にベルゼブブが嘲笑の目を向けるが、相手はとりあわない。

「自信はあるっちゃありますけどね～・・・でも、あの方ですかあ・・・はぁ・・・」

男女問わず、生まれた瞬間から灰になるまでがストラクゾーンで、容姿も特に問わず、どんな者でも懐柔し、張り合いのある相手であればあるほど燃えてしまう性のこの男であるが、あの鬼神だけには、手を出してはいけないという独自のセンサーが反応する。
一言も言葉を交わしたことはないが、容姿は整っているものの、ひと目みて「ナシ！」と判断し、それ以来頭の中から存在が消え去っていた人物だ。

なので、気が全く乗らない。目の前にいる上司のように、精神的に追い詰められて撃沈させられるのは御免こうむりたい。

ウーウーと文句をうなる悪魔に、とうとうベルゼブブが癇癪を起した。

「あああああああ！とにかく今回はお前がなんとかしろ！お前自身が嫌なら、部下にでも家来にでもまかせて堕落させればいだろうが！」

机をたたいて激昂するベルゼブブを冷ややかな目で見つめながら、悪魔はため息をつく。

「わかりましたよ・・・今回だけですからね。・・・さらに報酬は五割増しで、出来高であとの五割を後払いということで・・・」

「この・・・抜け目のないヤツめ・・・」

いけしゃあしゃあという悪魔だが、仕事を押し付けた手前、飲まないわけにいかない。それに、この悪魔の堕落方法は特別だ。

「で、この方いつこられるんですかぁ～？」

「三日後の午前中に来るそうだ。その後、二泊三日で悪魔の生態を見て回りたいらしい。」

その言葉に、悪魔の目に妖しい光がわずかにともった。

「へえ・・・それなら、遊び甲斐がありそうですね・・・」

悪魔は命ぜられた書面を指先で弾きながら、少し口元に笑みを浮かべて、訪ねてくるジャパン地獄の鬼神を思い起こしていた。

※中略※

しかし、鬼灯の体は淫らな魔具で翻弄され続け、白い肌が薄桃に染まり始めている。

（くすぐったい、くすぐったいだけで・・・決して、感じてなどっ・・・・）

自分が欲情し始めているのを認めたくない鬼灯は、かたくなに自らの現状を認めようとしない。

「まあこの黒の羽は、神経に直接触れるような錯覚を起こす作用がありますからね～。くすぐったい感触って、性的な快感と勘違いしやすいですし・・・」

次第に肌に触れてくる羽が力強くなり、より一層鬼灯を感じさせてゆく。

丸まった背筋に容赦なく羽を這わせ、時折鬼灯はうめき声をあげながらビクビクと小さく背筋を反らせる。

「うぅっ・・・あっ・・・」

背中だけでなく、下半身を責めるブエルの調子も次第に大胆になってゆく。足裏を羽でまさぐり、そのまま折りたたんだ膝を伝って大腿の上を這いまわる。
身体を丸めた体勢のため、下半身を覆う黒い着物がより肌に密着し、鬼灯のまろやかな臀部の形を浮き上がらせている。

「んっ・・・んっ・・・んんっ！」

ブエルの二本の羽がバラバラに動き、鬼灯の臀部を撫でさする。
鬼灯は一際大きなうめき声をあげ、その身体を戦慄かせ、熱い吐息を吐いた。

皮膚の表面で刺激されている快感神経が腰の奥にまで響き、愉悦が体中をゾクゾクと這いまわってゆく。
黒の羽が触れた部分から、身体の芯にまでしみこむような甘い刺激が浸透してゆく。
醜態はさらしたくないのに、身体は敏感に反応し、その屈辱に鬼灯の眉が寄る。

端正で鋭く、他者を寄せ付けない厳しさをもった顔立ちが、快楽に翻弄され、戸惑いを隠せない様は娼婦の欲情よりも扇情的に見えた。
清きを汚す背徳感が、責める者の手をますますつけあがらせてゆく。

鬼灯の表情を愉しむように、黒の羽の動く速度や速さが不定期に乱舞し、絶えず違う刺激を与えて鬼灯を自在に翻弄し続ける。

「ふぅ、ぅぅっ・・・んん・・・」

鬼灯の呻く声にも隠しきれない艶が見え隠れし、薄く色づいた白い首元から芳香のように色香が醸し出され、冷徹の鬼神を妖艶に仕立ててゆく。

「おおっ、ようやく瘴気が吐き出されてきたようですね～。もう一息、いや、二息、三息？」

冗談めかしたアデスの軽口にも反論できず、鬼灯は寝台の上で膝を抱いて丸くなり、できる限り身体をかばおうとする。
鬼灯の身体をほどこうと、背中や足へ黒の羽を這わせるが、刺激を与えられて身体をヒクつかせているものの、頑として身体を開こうとはしない。
だが、このまま二人が本気で羽を扱って責めれば、鬼灯は確実に身体を明け渡すだろう。それを予感させるほど、鬼灯の顔は上気し、小さな唇から熱い吐息を放ち続けていた。

「ん～、ホオズキさん、治療だってのにそんなに身体を固くされちゃ、ちゃんと瘴気がとれませんよ？」

興が乗ってきたらしいアデスが、黒の羽を片手に束ね、掌で直接鬼灯の耳に触れた。

「ふあぁっ！？あっ！ぁぁっ！」

その感触はまるで焼き鏝を当てられたかのような熱だった。しかし一瞬後には、それは苦痛ではなく、強引に神経を割り咲いて中芯までしみこむ強烈な快感だと判明する。
アデスが人差し指で鬼灯の耳朶をゆるゆると擦る度に、耐え難い快感が鬼灯の身体に流れ込んでくる。
黒の羽の愛撫など、はるかに及ばないほどの激感だった。

（み、耳だけで、こんなにっ・・・感じるなんてっ・・・）

これまでの経験で幾度も極限近い快楽を味わわされたことはあれど、たったこれだけの接触で、しかも一瞬でここまで快感を高められたことは稀だ。
しかも、感じやすいとは言え耳だけで瞬時に絶頂近い快感が襲うなど、ほぼ初めての経験と言えた。

「んんっ・・・！んっ！んぅぅっ！」

鬼灯が官能的に眉間を歪め、与えられる刺激で頭が揺れ、耳から与えられる快感はうなじを通って背中を伝い、体の中心へと直接伝わってゆく。
首を激しく振ればアデスの指からは簡単に逃れられるだろうに、鬼灯の体は焼け付くような快感で痺れきってしまい、ただ触れられるままに感覚を享受してしまう。

「んあっ！あぁあっ！はぁぁ・・・っ・・・！」

まるで耳だけで連続絶頂を強いられているような感覚に鬼灯は当惑し、抵抗する術も我慢することもできなかった。

アデスの魔手が耳を伝い、首筋に触れた瞬間、鬼灯の身体が冗談のように大きく跳ね上がり、頑なだった身体が大きく緩んでしまう。

「あっ・・・・・！」

その隙を逃さず、寝台の下から鉄の触手が瞬く間に鬼灯の両手足首を絡めとり、寝台へ大の字に張り付けてしまう。

「・・・っ、離してくださいっ・・・！」

精一杯の威圧を込めて命じるが、すでに抱かれる身体に仕上げられている身では、声色は懇願に近い。

先ほどのアデスの指にはかなり驚かされ、翻弄されたが、今度は四本の黒の羽が代わりに鬼灯の無防備な四肢を襲う。

「ほらほら、そんな怖い顔しないで～。治療ですよ、ち・りょ・お」

「あっ・・・・・！」

アデスの操る黒の羽が、早速鬼灯の開かれた胸を責める。

相変わらず、着物の上からだというのに直接肌に触れられているような感触、それだけに留まらない、重厚な甘い感覚。

二本の黒い風切羽が鬼灯の胸の上をクルクルと舞い、鉄の触手に押さえつけられた両腕が小刻みに震える。

（おかしいっ・・・この程度の拘束など、普段なら簡単に・・・）

与えられる甘美な感触に耐えながら、鬼灯は拘束を解こうと必死に四肢をバタつかせる。
しかし他人からみれば、本人が思っている以上には抵抗しているようには見えない。むしろ、余計に二人の操る羽に翻弄されているように見えるだけだった。

「あっあぁぁぁあっ！」

アデスの黒い羽先が胸の突起の部分に触れた瞬間、電気のように衝撃的な甘い痺れが、鬼灯を強かに打ちのめした。
鬼灯の弱点を突いた羽先はその場にとどまり、柔らかな仕草でそのまま胸の上を上下にこすり続ける。

「んぐっ！はぁ、はぁ、ああっ！あっ！ぁぁぁ・・・っ！」

自分でも情けない声が出ていると自覚していながら、口を閉じることができない。
黒の羽が胸の最も敏感な部分を掠めるたびに甘い電流が走り、ゾクゾクと背筋まで駆け抜けて、鬼灯の身体の熱を上げてゆく。

アデスは着物の上からでも的確に鬼灯の胸の突起を探り当て、黒の羽を強く押し付けながら鋸引きのように滑らせたり、羽先が触れるか触れないかの微妙な距離で上下に素早く動かしたりする。

「あああぁあっ・・・！あっ！や、め、はぁぁぁっ！あっ！あっ！」

どんな責めをされても鬼灯の上半身はビクビクと痙攣し、明らかに欲情で染まった声を上げて首を振り、黒髪を振り乱す。

もともと敏感な箇所を異常な魔具で触れられ、ただ触られるよりも段違いに快感を感じてしまう。

「ふぁっ！やっ！あぁぁぁぁあっ！」

両の突起に黒の羽を強く押し付けられ、素早く上下に擦られた瞬間、鋭い電流が鬼灯を襲い、ビリビリと神経の芯まで染み渡る愉悦が連続して訪れた。

「ぁあぁっ！やめてっ・・・くださ・・・っ！あっ！あっ！」

嬌声にまぎれて行為の停止を求めるが、普段の鬼灯からは考えられない可愛らしい甲高い声には、さらに責めたくなる嗜虐感を煽られど、止める力など全くこもってはいなかった。

「ぁあぁぁぁっ！だめ、だめっ！・・・止めっ・・・！んんんっ！んっ！んんーーーーっ！」

絶えず責められ続けている鬼灯が、荒い吐息を吐きながら切羽詰まった声を上げる。
息むような嬌声をあげたと同時に、上半身をビクリと硬直させ、ブルブルと小刻みに痙攣し始めた。

アデスは密かに笑みを浮かべると、鬼灯の身体の動きに合わせて羽の動きを緩め、呼吸に合わせて羽の動きを停止させてゆく。

しばらくして、硬直していた鬼灯の身体が解き放たれたかのようにドサリと寝台に落ち、一気に脱力して、紅く色づいた唇から灼熱の吐息を漏らす。

「はぁ・・・はぁ・・・ぁぁ・・・・っ・・・」

未だに上半身のあちこちをビクつかせ、鬼灯は放心状態で虚空を見つめている。

※中略※

「汗をふくんでしっとりし始めてから、まるで掌に吸い付くような滑らかな手触りに変わったぜ・・・」

新たな指が伸び、鬼灯の着流しを引き下ろして襟元を開き、肩口を露わにさせ、その白い素肌へと淫気を含んだ指が何度も滑る。

「ほんと、良い手触りですこと・・・」

聴覚からも恥辱の言葉を投げかけられ、鬼灯は必死に首を振って聞こえまいと抵抗を示す。

「はぁっ、はぁっ、私っ・・・私は、こんな事をしてる場合では・・・・」

「なんで？俺たちと「性」比べしたいんだろ？だったら何の不都合がある？」

「不都合ですっ・・・。私は、ただあなたたち悪魔の生態の研究をしにきただけで・・・・」

「だから、「性」態だろ？」

淫魔たちには何を言っても無駄だ。
望んでいない快楽を絶えず与えられ続け、このままこんな強烈な激悦を与えられ続けては、取り返しのつかない事態になりそうな予感に、鬼灯の心を不安と困惑が支配する。

しかし、心は拒んでいるのに、身体は快感で茹ってとりかえしがつかない。
抵抗する意思はあるのに、手足を暴れさせて反抗することもできない。愛撫を払いのけようとすると、途端に腕の力が萎えてしまう。

（気絶している間に、確実に何かされたな・・・）

先ほどまで同室していたアデスとブエルを恨みに思いながら、鬼灯は後悔と怒りで奥歯をかみしめた。

しかし、淫魔たちの責めは相変わらず続けられる。

胸の突起を強くつままれ、上半身に快楽の電流がビリビリと流れた。

「あああああっ！」

絶頂こそしなかったが、相当するほどの強烈な快感を与えられ、鬼灯が汗を飛び散らせて上半身を反らせる。

「ほんと、感じやすい身体だなあ・・・じきに俺たちなしじゃ生きていけない身体になるぜ・・・」

背後から鬼灯の突起を責めている淫魔は、両の突起を同時につまむと、ビンビンに固くなったその部分を、器官を扱くように根元から先端まで荒々しく擦り付けられ、頭の神経が焼き切れそうな快感が連続して鬼灯を襲う。

「あぁぁっ！あっ！あっ！あっ！あああああーっ！」

甘く裏返った声が室内に響き、首を振る鬼灯の黒髪が激しく乱れ狂う。

硬くとがって敏感になった突起を上から押しつぶされ、指先で激しく細かい振動を与えられ、高まりきっていた快感が一気に沸点まで押しあがった。

「いいっ！あぁぁぁあ！はぁ、あ、あああああああああ！」

胸を突き出す格好で激しく背中を反らし、鬼灯が派手に胸で絶頂を迎える。淫魔たちの相手をし始めて、はじめての胸絶頂だったが、それは、今までんさんざん数えきれない愉悦を極めさせられた鬼灯でさえ、戸惑うほどの強烈極まりない激悦だった。

「あっ・・・ぁ・・・ああ・・・はぁぁ・・・んんっ！」

呆然として焦点が定まっていない鬼灯を感じながら、背後の淫魔はさらに突起へと刺激を与え、放物線を描いて治まってゆく絶頂を待たず、終わりかけた快感が、再び呼び戻されてしまう。

快楽で震える鬼灯の白い肢体を眺めながら、悪魔たちは一人残らず欲情のまなざしを向けていた。
確実に愉悦をむさぼっているのに、嫌だと頑固に拒絶したがる態度が、彼らの支配欲を駆り立てる。

何より、鬼灯から放たれる甘い淫香が空気を染め上げ、滴る汗からも咽かえるような色香が立ち上っている。
病的に白い肌に、帯でかろうじて引っかかっている黒い着流しの対比が絶妙で、清廉を汚す背徳感が淫魔たちの興味をさらにあおった。

胸だけで深く絶頂させられ、身体を弛緩させて喘いでいる鬼灯へ、再び三本の舌が内股へ差し込まれて自身への責めが開始される。

（はぁぁっ・・・これ、だめです、もう気持ち良すぎて、頭がどうにかなりそ・・・）

そこで鬼灯は自分の心の中の感情に戸惑いを覚えた。図らずも「気持ち良い」などと思ってしまった自分が情けない。
しかし、何故情けないと思ってしまうのかもわからない。

ブエルのコントロールで鬼灯の心は千散に乱れ、自分の意識をブレさせながら、ただ与えられるだけの快感に流され続けていた。

股布の中では三本の舌が激しく蠢き、器官を覆うための役割である下着はただの窮屈な布きれと化してしまっていた。

「ふふ、苦しそうだから、そろそろ見せてもらおうかな・・・」

そう言って、額に縦の目がある淫魔が、ぐしょ濡れの股布に手をかけた。すべて脱がせるのではなく、自身を覆っている部分だけをずらしてその奥を白日の下にさらす。

「おお、これはなんと美しい、穢れない逸品ですね！」

鬼灯自身を目にした淫魔が、目にしたとたん賛辞の言葉を投げかける。

「色素沈着もなく、まるで少年のように穢れを知らない、無垢を感じさせる薄桃の代物だ！これは見ているだけで、触らずにいられない欲望に駆られてしまいますね！」

自分の一番恥ずかしい部分を勝手に評価され、見られているだけでも相当の羞恥を感じているというのに、鬼灯はその淫らな解説に激しい羞恥と怒りを覚えていた。

「だっ・・・だまりなさい・・・っ・・・んふっ！」

解説していた淫魔に片手で先端を握りこまれ、燃え上がるような快感が湧き上がってくる。
淫魔たちの手指からは特殊な魔力が流れているらしく、それは媚薬と言い換えてよい、相手を興奮させる作用を持った力だった。

鬼灯の肌は鋭敏になり、触れられる指の指紋さえ感じ取れるほど敏感になってしまっている。
そんな調子で脇腹などを撫で回され、くすぐったさに似た快感で紅くそまった唇から快楽の吐息が零れ落ちる。

「この子最高だなあ・・・身体はもうメロメロなのに、まだ反抗する気でいるみたいだぜ」

「肌触りも最高だし、身体も程よく締まっている。これからのことを考えると、ゾクゾクしてくるよ」

「んんっ・・・はぁ・・・っ・・・下種っ・・・めっ・・・！」

急所の先端を大きな掌で包まれて柔らかく撫で回され、あふれ出る固唾をのみこみながら、鬼灯が反抗の意をしめす。

「へえ、その下種に触られて感じちゃってるのは、誰かな？」

意地悪そうに言い放ち、鬼灯自身を責めていた手が激しく上下に動き始める。

「はぁぁぁうんっ！いっ、あ、くううぅぅっ！」

途端に鬼灯の身体がビクンと大きくこわばり、次の瞬間には愛撫する掌の隙間から白濁がトロトロと流れていた。

「うっぅぅ・・・」

（極めたくなど、ないのに・・・っ）

射精の快感で白んだ頭を奮い立たせ、鬼灯が心中で嘆く。
しかしそんな鬼灯の心などお構いなしに、淫魔たちの責めはさらに変化する。

上体を起こしていた鬼灯の肢体を寝台へ仰臥させ、無理矢理開かされていた両の足首に力を加え、そのまま持ち上げると手を膝裏へと移動し、鬼灯の身体が二つに折られて、そのまま世にもはずかしいM字型ポーズに似た羞恥の格好をさせられてしまう。

「うあっ・・・やめ、なさい・・・」

大胆に開かれた鬼灯の両足の中心に、股布をずらされて露わになった薄桃の自身が、淫靡に濡れ光って存在している。

（どうして、抵抗できないんだ）

これほどの羞恥と屈辱を受けながら、鬼灯は悔しさで唇をかみしめる。普段の力が出せれば、彼らのような堕落した淫魔など一網打尽にし、城の外へ殴り飛ばすことも可能だというのに。

「くくっ、エロい恰好！」

「こいつ、乳首もピンクだぜ」

「色が白いからなあ」

「ほら、可愛がってやるぜ・・・」

下半身を隠そうとする鬼灯の両手首を掴み、鹿に似た角の生えた淫魔が、ベッドサイドから舌を伸ばして耳を柔らかく愛撫する。

「んんっ！も、もうやめなさい！すぐに体勢を元に・・・あぁぁぁっ！」

中途半端に引っかかったままの股布の上方を引っ張られ、身体の中心にゾクリとする衝撃的な愉悦が走る。

指にひっかけた布をクイクイとひっぱり、どんどん両足の間に食い込むよう、いらずらされる。

股布がかかっていない自身に刺激はほとんどないが、その下の会陰部やさらにその奥にある秘孔の入り口が刺激され、鬼灯は淫液でぐしょ濡れになった股布で責められ続けた。

上半身や器官はさんざん嬲られたが、まだ秘めた部分だけは手つかずのままにされている。

淫魔たちは当然逃すことなく、間もなくこちらも責めてくるだろう。

そうなったとき、自分は理性を保てるだろうか、と鬼灯に不安がよぎった。

実際、後ろの秘めた部分は彼らの愛撫が始まってからどんどん熱く、疼きだし、人目がなければ自らで指を使って慰めたくなるほどの激しい疼きを感じていた。

そして今、ほぼ一本の紐と化した布に入り口を刺激され、それだけで、腰が痺れるほどの愉悦が走る。

さらに、これからされるであろう快楽の刺激を思うと、身体が勝手に期待して、情けなく震えてしまう。

「長い脚だな。体毛も少なくて、スベスベしている。尻の形も文句ない」

口が猫のように裂けた悪魔が、柔らかい毛の生えた掌で鬼灯の美脚を撫で回し、股布を食い込まされてほとんど全部露わになってしまっている臀部を撫で回す。

柔らかい毛の感触が心地よく、ゾクゾクと腰や脚に刺激が走る。

「っ・・・触らないでください・・・」

なるべく凄みを効かせた声で抗議したつもりだったが、淫魔たちには快楽に流されまいと必死に抵抗する獲物の泣き声にしか聞こえない。

「じゃあ、舐める」

そう言って鬼灯を囲む悪魔たちはのろのろと鬼灯に近づき、それぞれの舌を伸ばして甘美な肌の感触を楽しみ始める。

「んんんっ！はぁぁっ！っ、な、舐めるのは、もっと・・・だめ・・・んむぅぅ・・・」

口づけをされ、しゃべる口を閉じさせられてしまう。口腔に入り込んできた舌はザラついた感触で、おそらく毛が生えているのだろう。
口の中の敏感な部分をザリザリと舐りまわされ、歯茎や上顎の裏を舐められると、首の後ろや額のあたりがゾワゾワし、舌に巻きつかれてそのまま強く吸われると、頭がカアっと真っ白になる。

「んんっ、んっ、んふ、んっんっ・・・ふっはぁ・・・ぁぁ・・・っ止め・・・・」

淫魔たちの舌は普通の人間とは違い、それぞれ厄介な特徴がある。猫の舌のようにザラザラした毛を表面に生やしたもの、ウナギのようにヌルヌルしたもの、濡れた筆先のように繊毛を生やしたもの、細かく硬いイボを無数に生やしているもの、多種多様な感触が一斉に鬼灯の鋭敏な身体を舐めにかかる。
粘る唾液を持った肉厚の舌が鬼灯の耳を舐めしゃぶり、淫らな効果を持つ唾液でべとべとにしながら、時折耳朶を口に含んで甘噛みをし、柔らかく歯を立てる。

「はぅぅ・・・っ耳、耳は・・・」

ただでさえ敏感な耳を淫魔の技巧で淫らに責められ、首すじを通って背筋にまで快感が走ってゆく。

「うん、確かに汗の味も悪くないぜ」

「はぁぁぁ・・・っああっ・・・・・・！」

臍から首筋にかけてヌルつく舌が一気に舐めあがり、たったそれだけで鬼灯の身体が快感で痺れてしまう。

ビクビクと快感の反応を返す鬼灯の身体を面白がり、淫魔たちはさらに責める舌を増やしてゆく。

「やだやだって言いながら、いちいちエロい反応するぜ・・・。乳首もこんなに立ち上がって、おら、舐め回してやるよ」

「んんっ！やっ・・・うぅぅぅんんっ！」

抗議する口はキスで再びふさがれ、宣言した淫魔が最も鋭敏な鬼灯の胸の突起に舌を伸ばした。

※中略※

「グルル・・・じゃあ、本気出すぜ・・・」

不穏な空気を身体にまとわせ、獣人は一旦鬼灯から口を離すと、喉が不自然な隆起を見せ、相手を責める新たな器官を形成する。
上体をベッドに押さえつけられ、獣人の姿を見れない鬼灯は、何度も身体の粘膜がこすれあうような怪しげな音だけで、相手の様子を探るしか術がないため、不安だけがどんどん増長してゆく。

周囲の淫魔たちから小さな歓声が上がり、変異が完成したと思われた。下を見ることを頑なに阻まれ、頭上から伸ばされた手に顎を取られ、口の中に指を突きこまれ、舌を絡まされる。
性感帯になった口内を触られて、一瞬注意がこちらに向いた瞬間、獣人の熱い舌が再び両足の間を舐め上げてきた。

「あぐぅぅっ！」

唐突に訪れた快感に腰が跳ね上がるが、獣人の毛むくじゃらな強力な手で抑え込まれ、そのまま二度、三度と舐め回されてしまう。

「何回イッても、容赦はしないぜ・・・悶え狂え！」

獣人が宣言すると同時に、鬼灯自身に奇妙な感触が走った。
自身の裏側を上下に舐めている舌に加え、同じような熱い舌の感触を先端部分で感じたのだ。

（ま、まさか、二本・・・！？）

不安に駆られる鬼灯を置き去りにし、予測どおり二本に増えた淫らな舌が性感帯を舐め回し続ける。
新しく生えた一本は異様に長いらしく、鬼灯自身に巻き付いて、心地よい締め付けを与えながら上下に扱き上げ、絶え間なく快感を与え続けて来る。
元からあった舌は熱い唾液をふんだんに絡ませ、最も弱い先端部分を器用にこね回し続ける。

「あぁ！あっ！あっあああっ！んあぁぁぁ！」

腰を激しく震わせ、鬼灯は派手に絶頂を迎えた。しかし獣人の舌は止まることがなく、変わらぬ勢いで敏感な器官を責め続ける。

「はぁ、はぁ、ああああっ・・・！そこっ・・・ああ、だめっ・・・！」

鈴口から入り込むような勢いで先端をこね回され、鋭敏な性感帯に激しい刺激を受け、鬼灯が艶まじりの悲鳴をあげる。

「容赦しないって言っただろ？」

獣人は喉の奥で小さく笑い、鬼灯に食らいつくかのように大口を開けて器官をすっぽり口内へ包み込み、そこからさらに舌を激しく蠢かせる。

「はぐっ・・・！うぅっ！んあぁ、ああぁぁっ！」

激しい快感の連続に、鬼灯が身も世もなく悶えまくる。普段からは想像もつかない艶声をあげ、表情をゆがませ、目端から大粒の涙をこぼす。
舌が二本に増えてから三度目の絶頂を迎えさせられ、はあはあと快楽の余韻で荒く息をつく鬼灯を尻目に、獣人は一度口を開けて開放し、再び角度を変えて舌を滑らせる。

「はぁっ・・・うぅっ！？」

自身で感じる快感に陶酔していると、そのさらに下方の部分へ、ヌメる舌の感触が這い伸びるのを感じた。
二本のうち、長いほうの舌が精液を抱える器官をベロリと舐め、そのまま会陰を通過し、舌を左右に動かして鬼灯を感じさせる。
小さく跳ね上がる腰を押さえつけられ、舌がたどりついたのは後ろの秘められた入り口だった。
侵入を阻む窮屈な入り口をざらつく舌が何度も舐め回し、性感を与えてゆっくりとほぐしてゆく。

「ああっ・・・ぁぁっ・・・、あっ・・・気持ち・・・わるっ・・・い・・・」

真逆の言葉をあえて吐き、理性を保とうと鬼灯は必死になる。
敏感な入り口を舐め荒らされて、腰の細かい痙攣がとまらない。

「んぐぅっ・・・!いっ・・・!」

とうとう先端を硬くとがらせた舌先が秘孔の中へ入り込んできた。一度侵入を許せばあとは容易く、長い舌を身体はどんどん飲み込んでゆく。

「はぁぁ・・・っあっ・・・うぅぅぅ、くあ、あ、あ、ぐうぅ・・・！」

内壁を刺激される独特の感覚を、短い息つぎでなんとか耐え、歯をくいしばる。しかし、舌独特のヌメった感触とザラザラした糜爛の感触が性感帯を狂わせ、絶えず鬼灯に激感を伝えてくるのだ。

（うううう・・・一体、どこまで深く・・・入る、つもり、ですかっ・・・）

熱い舌は普通の剛直ではありえない奥部分まで侵入し、それでも動きを止めようとしない。少しずつ媚薬効果のある唾液が内壁から直接吸収され、身体の奥からじわじわと耐え難い欲情が湧き上がってくる。

「どうだ、全部入ったか？」

様子を眺めている淫魔の一人が声をかけ、鬼灯の身体の具合を問う。

「狭いなあ・・・狭くて、ぎゅうぎゅうに締め付けて、まともに舌が動かせないぐらいだぜ・・・。中はザラザラしてて、奥は熱くて、イッて痙攣したときはバイブみたいな感覚がする」

両方の舌を鬼灯を嬲ることに費やしているというのに、獣人は一体どこから声を出しているのか、鬼灯の洞内の様子を淡々と語る。

「んんんっ！ああっ！はぁ、そこ、そこは、触らないでっ・・・！やめ、やめろっ・・・！」

舌の一部が洞内で最も感じる前立腺を激しく舐め擦り、鬼灯が電気に打たれたかのように背中を反らせて激しく反応をしめす。それに気をよくした獣人は、当然「やめろ」と指摘された箇所をさらに執拗に、重点的に舌でこね回した。

「あああぁぁあぁぁ・・・っ！あっ！あっ！はぅぅっ・・・！やめ、やめ・・・」

うわごとのように停止を求めるが、その声は快楽で裏返り、十分逆の意味にとれるほど官能的な響きを秘めていた。
獣人の舌が、鬼灯自身を舐めながら、後ろの洞内も蹂躙する。長い舌がズルズルと引き出され、後ろで感じる最上の快感を与えられてしまい、鬼灯が悶絶する。
同時に自身からも白液を噴きこぼし、腰から下が快楽で蕩けるようだった。

「あうぅっ！あっ！あっ！あっ！あ、あ、あっ！やめ、っっ！あああああ！」

獣人の舌はしつこく鬼灯自身を舐めしゃぶり、もう一方は、異様に長い器官と言って差し支えないほど、激しく内壁を擦りながら出入りを繰り返している。
舐めつくされ、しゃぶられ、身体の内を快楽で散々痺れさせられ、もう何度絶頂したかわからない。
気を失う寸前でようやく獣人の舌は止まり、鬼灯の中から一気に引き抜かれ、自身も解放された。

「う・・・・あ・・・はぁぁ・・・・」

責めつくされて身体を弛緩させる鬼灯から、むせかえるような色香が立ち込める。
その艶姿にあてられて、淫魔たちはそれぞれ手をのばして鬼灯の身体へと触れてきた。

下半身だけではなく、上半身にも淫魔たちの手は伸び、下半身の連続絶頂で燃え上がっている肌へと責めの手を伸ばしてゆく。

「はぁ、はぁ、も、もう、触らな・・・ぁぁぁああっ！」

触れられたくてウズウズと存在を示していた胸の突起を強くつままれ、それだけで絶頂の波が胸へと染み込んでゆく。

再び口づけや耳舐めも開始され、体中の性感帯すべてを一度に責められてしまう。

「んんっ！んっ！んんん、んんーーーーーーーーっ！」

自身でも絶頂し、後ろでも絶頂し、胸でも、耳でも口でも絶頂する。
身体中のあらゆる部分が絶頂を繰り返し、絶頂の数を数えることなどとうに忘れ、ただ鬼灯はされるがまま乱れ悶えた。

（も、もう無理だ、イけない、イきたくないっ・・・でも、ぁぁぁ・・・触られると、身体が勝手に疼いてっ・・・・気持ち・・・・良い・・・・・）

ブエルのコントロールも働き、快感状態にある鬼灯の身体と意思は、本来の目的よりも快楽を優先するようにされている。
飽きるほど身体中で絶頂させられながら、鬼灯はむせび泣き、乱れ、また絶頂し、次にはさらにそれを越える深い絶頂を味わわされる快楽地獄に貶められていた。

「百回ぐらいイったら、休憩させてやるよ」

「っ・・・・・！」

途方もない数字を遠く耳で聞きながら、またもや下半身に絶頂の波が襲ってくる。

「あああああっ！ああっ！あああああああああーーーーーーーっ！」

洞内の強烈な絶頂と自身の激しい射精の絶頂が重なり、小さな口が裂けそうなほど広げられ、精一杯の艶声を張り上げる。

「ぅぅっ・・・・・ぅ・・・・はぁ、ぁぁ・・・・あっ・・・・」

熱い舌や指が身体中を這いまわる感触に浸りながら、鬼灯は意識を失うこともできず、淫魔たちの可愛い玩具となってしまっていた。

※中略※

挿れられているだけでズキズキと与えられる魔悦に、鬼灯が艶めいた吐息を放ち、後ろから伸ばされた手でさらに膝を抱えこまれて身体が動き、それだけで内壁が擦れて痺れるような愉悦が腰から足のつま先までをジンと痺れさせてゆく。

「では、そろそろ動きますよ。存分によがり狂ってください」

「あっ・・・うぅ、止めっ・・・・あああああっ！」

両腕で抱えた鬼灯の両足を抱え直し、再び浮き上がらせたと同時に自らも腰の動きを使ってゆっくりと剛直を引き抜いてゆく。
鬼灯の中では、突き入れられて下を向いていた釘打ちの頭が、今度は擦れながら上へと向きをかえてゆく。その弾力とコリコリとした感覚が鋭敏な性感帯を覿面にうち、鬼灯は引き抜かれただけで絶頂近い快感を感じさせられてしまう。

「ほら、今度は突き上げますよ・・・」

足を持ち上げる力が緩められ、淫魔も腰を同時に付きだし、再びグロテスクな形をした剛直が鬼灯の中へ入ってゆく。

「はぐっ、うぅぅっ・・・・ううんんんーーーーっ！」

鬼灯の白い身体がブルブルと震え、体内を襲う激感を必死に耐える。
先の淫魔との性交で精液を中出しされ、強力な媚薬効果をもっていたらしいそれは鬼灯を疼きの渦中に放り込み、刺激を欲してやまなかった部分を、今、予想以上の感覚で擦り荒らされている。
その快感はすさまじく、剛直が中でほんの少し擦れるだけで、足の先から背筋をゾクゾクと通過して、頭の後ろにまで快感が響くほどだった。

「あああああ・・・っ、ふぁ、ああぁ、ううっ・・・」

小さな口から尖った八重歯を見せ、切れ長の瞳を潤ませて、紅い舌をのぞかせて快楽に酔う姿が、たとえようもなく艶っぽい。
正面からその艶姿の全てを眺めていた緑色の淫魔が生唾を呑みこみ、鬼灯の前身に近づいてゆく。

「気持ちいいか？エロい顔してんな・・・もっと気持ちよくしてやるからな・・・」

淫魔も興奮を隠しきれず、熱のこもった低い声で鬼灯の耳にささやくと、先ほど鬼灯を戦慄させたアロエ茎の剛直を取り出し、目の前にさらした。

（ま、まさかこれをもう一本挿れるのではっ・・・！）

鬼灯は懸念したが、淫魔は挿入ではなく、強引に開かされた両足の間に、その異形の器官を密着させてきた。

「んっ・・・何・・・するんですかっ・・・」

鬼灯自身と異形の剛直が接触し、そのまま力強く押し当てられる。鬼灯は不覚にも、相手の体温の熱さだけで腰を甘く震えさせてしまった。

「まず、俺のモノの感覚に慣れてもらうために、素股させてもらうぜ・・・だけど、甘く見るなよ？たぶん世界で一番気持ちいいと思うぜ・・・？」

淫魔はさらにグイ、と身体を鬼灯に近づけ、熱く滾る剛直を鬼灯自身に強く押し当てた。アロエの葉然とした不揃いの大きなささくれが敏感な性感帯に押し当てられて、ゾクリと腰を震わせてしまう。しかし、葉状になっている部分はあくまでも柔らかく、ゴムのようにグニグニと動いて、先端部分にコリコリとした突起を備えていて、その確固たる刺激が、さらに鬼灯に甘美を呼び起こした。

「うぁっ！あぁぁっ！はぁぁ・・・・！」

思いがけない強烈な快感に、鬼灯が甘い声を上げる。ズルズルと上に一擦りされ、それだけで自身の先端から先走りの液が次々と零れ落ち、互いの器官が熱い淫液で濡れ始める。
前が感じれば後ろも強く締め付けてしまい、洞内を占めている凶悪な剛直を強く締め付け、自ら性感帯に凶悪な突起を押し付けてしまう。

「んぁぁっ・・・やめ・・・止めて・・・っくださいっ・・・！」

あまりの快感に身体中をヒクヒクと痙攣させながら、鬼灯が誰ともなく哀願の声を吐く。
しかし淫魔たちは当然聞き入れず、さらに鬼灯を激しく責めにかかってゆく。

「ほら、今度は突き入れますよ・・・」

「うあっ！あっ！あっ！あっ！あああああ！」

紳士風の淫魔が鬼灯を支える力を抜き、再び凶悪な器官を白い臀部にめり込ませてゆく。

「ふぐっ・・・！うううぅっ・・・！」

釘に似た形状の、弾力ある無数の突起が敏感な内壁を擦り上げ、その激感に鬼灯が泣き声のような嬌声を上げる。
それと同時に、密着させられたアロエ葉のような器官に自身をズルズルと擦り扱かれ、体中の力が抜けそうなほどの、こらえがたい愉悦が鬼灯を襲う。

（こ、こんな、二か所も同時にっ・・・・二人がかりでっ・・・！）

予想をはるかに上回る激悦に、鬼灯は逃げる意思すら思う浮かばず、ただただ与えらえれる快感をいかに感じないようにするかという、どうあがいても無駄なことで頭を占めさせていた。

後ろの剛直を再び根元まで銜え込み、鬼灯の身体が歓喜で打ち震える。

動かされなくても、入り口付近に生えそろった突起や、普通の性交では到達できない深い部分を触手の束でざわざわと動かされ、それだけで絶頂しそうになってしまう。
加えて、触れられているだけで、染み入るような愉悦を感じる熱と弾力と硬さの揃った器官のせいで、腰から下がトロけてしまいそうな甘美な心地よさで、鬼灯のなけなしの理性を確実にをうばってゆく。
後を動かされると、その感覚だけで身体全体が痺れそうな快楽に包まれるのに、さらに前身でも意識が飛びそうな快感を押し付けられる。

「んんっ！はぁ、あっ！あっ！あああああっ！ぁぁぁぐ・・・っ！」

洞内をゆっくりと上下に動かされ、中で感じる、灼けるような熱と異様な突起物が、敏感な上、快感に対して貪欲な性感帯を激しく反応させてしまう。

（も、もうだめだ、イク、極めさせられてしまう・・・）

せめて絶頂の気配を悟られまいと努力するが、鬼灯の身体は絶頂直前の硬直した身体をどうすることもできず、百戦錬磨の淫魔にかかって、絶頂を悟られてしまう。

「ふふ、もうイキそうですか・・・?まだ一往復しただけですよ?そんなによがっていただけて、こちらも嬉しくなりますね」

背後から紳士風の淫魔が耳元で囁き、鬼灯の腰をわざと軽く揺らめかせる。

「はぁ、はぁ、あぁぁぁ・・・・」

たったそれだけで入り口の突起物が擦れ、内壁が意識せず動いてしまい、感覚が体内を伝わって体中に伝わってしまう。

「こっちも気持ちいいだろ?」

緑色の淫魔が鬼灯へさらに迫り、より異様な剛直を密着させ、強く感じさせてくる。普通の感覚ではありえない硬さと弾力とデコボコの感覚に、ビクリと身体が跳ね上がるのを止められず、そうなれば体内も締め付けて余計に感じてしまうという快楽の悪循環に陥ってしまう。

しかし、鬼灯を責める両者は完全に本気を出してはいない。

選りすぐりの淫魔と言われている彼らが本気を出せば、恐らく今までとは比べ物にならない激しさになるだろう。だが、あくまでゆっくりした動きで、鬼灯を蝋燭で炙るかのようにジリジリと、確実に感じさせてゆく。

（んんっ・・・イク、もう、イッってしまうっ・・・！）

「うぅっ・・・もう、やめ・・・」

鬼灯の言葉が終わらない内に、後ろから鬼灯の身体を支える淫魔が両手に力を込め、一気に剛直を先端まで引き上げる。

「っっ！あああああっ！」

突き入れられるよりも引き抜かれるほうが感じる後悦で、今までの動きに輪をかけた激しさで一気に身体を掲げ上げられ、腰を引き抜かれてしまう。
剛直の突起が内壁をコリコリと擦り、最も感じる一点を何粒もの突起が通過し、一気に絶頂へ引き上げられてしまった。

絶頂を感じたのは後ろだけではなく、密着させられたアロエ葉のような器官も同時に自身へ擦れ、のけ反らずにはいられない強烈な快感が駆け巡る。
あまりの激悦に翻弄され、自身から勢いよく白液が吐き出されるが、鬼灯はあまりの快感の凄さにそれにすら気づいていなかった。

「はぁっ・・・・ぁぁ・・・ぁあぁあ・・・・」

ビクビクと鬼灯の白い肢体が痙攣し、表情が快楽を極めきったトロけた表情に変わり、つりあがっている眉がハの字に垂れ下がり、口の端から快楽の涎を垂らし、絶頂に耽溺した彩に変化させている。

「ふふ、エロっぽい顔・・・たったこれだけでそんなに気持ちよかったんですかぁ～？」

アデスが近づいて鬼灯に話しかけるが、返事は熱にトロけた荒い吐息だけだった。

「うーん、どうやら返事する余裕もないみたいですねぇ。でも、まだまだこれからですよ？この程度で意識を飛ばしてちゃ、快楽死しちゃうかもしれませんよ～？」

まあ、もう死後の世界にいるからそれはあり得ませんけど、とアデスは付け加えて、いまだ快楽の余韻で小さく震えている鬼灯の一本角に口づける。

「んんっ・・・」

神経が通っていないはずの角だというのに、この悪魔に触れた部位はすべて性感帯になってしまうかのように、敏感に感じてしまう。

「じゃあ、僕はそろそろおいとまします。また明日の朝こちらに来ますから、それまでみんな、ホオズキさんをうんと可愛がってあげてくださいね」

アデスの声かけにそれぞれ悪魔たちは頭を下げたり会釈したりして、主人が扉から消えていくのを見続けた。

「へへ、ご主人様がいなくなったから、これで思いっきり責められるなあ・・・」

「壊さない程度にって言われたけど、俺たちが普通にセックスしてコイツが勝手に壊れたら、それはそれでしょうがないよな・・・」

不穏な会話をささやきあい、淫魔たちは鬼灯をさらに熱っぽい視線で眺めつける。

「じゃあ、そろそろ我々にも快楽を与えていただきましょうか・・・」

※中略※

淫魔の先走り液を直接受けて極度に敏感になってしまった口の中は明確な性感帯となっていた。
口腔の剛直が乱暴に擦れる度に、首の後ろまでゾクゾクと愉悦が走り、切ない気分が湧き上がってくる。

「んぐっ・・・ふぅぅっ・・・！」

激悦にさらされ続け、ブルブルと痙攣する鬼灯の白い肢体。シーツを固く握りしめて快感をこらえていたが、脇に迫った淫魔に振りほどかれ、ひどく熱くてヌメる物体を握らされる。

「どうせ握るなら、こっちを頼むぜ？」

そう言って鬼灯に無理矢理剛直を握らせた淫魔が、たおやかな鬼灯の手の上手に自らの手を重ね、上下に扱くよう誘導する。

「んふぅぅ・・・っ！」

口淫を強要されている口腔内もそうだが、握らされている掌が異様に心地よく、甘い痺れが伝わってくる。おそらく淫魔の分泌する先走りの液に催淫効果があるのだろうが、まさか性感帯以外の場所まで同様に快感を感じてしまうようになるとは、淫魔の責めとは身体中の性感を書き換えてしまうほど強烈で容赦のない仕業だった。

「こっちも頼みますよ、お兄さん」

同じくシーツを握りしめていたもう片方の手にも淫魔の熱を掴まされ、上下に擦るよう奉仕を要求される。

「美しい黒髪・・・さぞや心地よいでしょう」

鬼灯の滑らかな黒髪に剛直を突きこみ、巻きつけて扱かれるが、その感覚が頭皮にも伝わってうなじにまで甘い痺れに似た感覚が走りまくる。

（こんな、屈辱的なっ・・・）

心の中は悔しさと屈辱ではち切れそうだったが、身体は素直に快感を受け入れ、淫魔たちのされるがままに身体を動かしてしまう。
度重なって塗り重ねられた淫魔の媚薬のせいで、鬼灯の全身中が、最も感じる自身の先端と同じ感度にまで引き上げられている。

体内を突き上げられ、自身を擦られ、両胸を責められ白い腹にも異形の舌が這い、口には熱い剛直、両手にも手指が痺れるような感触の熱が握らされ、絶頂に次ぐ絶頂で、鬼灯の意識は次第に抗うことを考えられなくなり、鋭い眼光も、身を溶かす快感で完全に緩み、凜としていた美貌をこれ以上ないほどに淫らに染め上げていた。

「んふぅ・・・んっんんんっ、んぐっ、ぷは、あぁぁっ・・・ああっ！」

下半身で責められている部分から再び絶頂の波が全身へと広がり、ますます身体中の神経を鋭敏にして、そこかしこをさらに敏感に反応させる。

限界まで性感が高まり、連続絶頂状態の鬼灯に構うことなく、淫魔たちは自らの欲を吐き出そうと鬼灯の身体を使う。

「んんんっ！あむぅ、ちゅっ・・・んん・・・っ！ふあぁぁぁ・・・」

快楽にトロけきった声を上げ、何度も強烈な射精や後悦絶頂が下半身で弾けまくる。その絶頂の波が上半身にまでおよび、嬲られている胸の突起を敏感にさせてたちまち絶頂し、背中を反らせて悦波を受け入れると、今度は口や掌にまで喜悦が及ぶ。

「んぐっ、ふぅ、んん、んっ！んむぅ、れるっ・・・んんんっ！んっ！んぐぅぅ・・・！」

口で奉仕する剛直の熱が一気に高まり、出し入れが激しくされてゆく。そしてほぼ同時に両手の動きも早くするよう急かされ、何も考えられず鬼灯はされるがままに感じるだけしかできずにいる。

（ううっ・・・だめだ、これ以上は、もうっ・・・あぁぁ・・・意識がっ・・・イク、もう、気持ち良い、良すぎて・・・）

鬼灯の中を味わう淫魔の動きが急激に激しくなり、鬼灯の爛れたように敏感になった内壁が手加減なしで扱き抜かれ、連続絶頂に陥らされる。
射精の数十倍とも言われる快感は、何度味わっても恐ろしく深く、しかも身体中を駆け巡る凶悪な甘美さを伴っている。

「んんんんっ！んは、はぐっ！んむぅぅっ・・・！うぐ、んぐ、ん、ん、んんんんーーーー！」

下半身を揺さぶられる動きが一気に高まり、あまりの快楽の連続に目の前で何度も火花が散る。
汚されている自身も。手も、胸も口も、どこもかしこも激感にさらされ、恐ろしく灼熱のように熱く、それがどんどん天井知らずに高まって行ってゆく。

（いけない、イク、意識・・・飛ぶ・・・だめだ、意識が、意識がっ・・・！）

鬼灯の身体は最高潮に高まり、淫魔たちの興奮も興に入った。
身体の中を暴く動きは一気に速まり、もう絶頂の境がわからないほど、鬼灯は激悦の奔流にさらされる。
自身を擦りたてる動きも激しくなり、意識が白むほどの深い射精を強要され、責められ続ける胸の突起、口の中、両手、すべてが一気に激しさを増し、鬼灯の感じる快感が強烈になる。

「あぁぁっ・・・！はぐぅ、んんん、んんっ！んんーーー！」

粘液と淫液で身体中をめちゃくちゃにされ、鬼灯はかつてないほど深い悦を感じ、派手に絶頂したと同時に淫魔たちの快楽も極まった。

まず鬼灯の中を荒らしていた釘打ちの剛直が一気に膨れ上がったかと思うと、次の瞬間にはとてつもない勢いで精液を射出し、鬼灯の体内へ一気にブワア・・・と灼熱の液体が体内に注がれてゆく。

「んんんっ！？んんっ！んぐぅぅ、熱っ・・・ふぁ、ん、んんんっ！んんーーーーー！？」

次いで口を犯している剛直の動きも速まり、素早い抜き差しの動きが繰り返されたかと思うと、ほぼ器官と同等の感度になった口腔にも淫魔の精液が吐き出される。

「んんんーーーっ！んんっ！」

剛直は鬼灯の口から抜き出る気配を見せず、そのまま灼熱の淫液を口内へと流し込み続ける。
口の端から残滓をこぼれさせながら、鬼灯の喉が何度もゴクゴク、と鳴り、強制的に精液を飲まされて喉へ灼熱の液体を注がれてしまう。

（熱い、喉が灼けそうです・・・でも、これ・・・あま・・・い・・・）

不覚にも美味だと感じてしまった自分を情けないと思う気持ちすら、体中を走る快楽の前に流されてしまう。
唾液のなる音が鬼灯の耳を犯し、口腔や喉粘膜を摩擦し、味覚や嗅覚、聴覚でまで感じさせた。淫魔の精液は鬼灯の喉の粘膜を刺激し、食堂まで侵入して快感神経を鋭敏にさせてゆく。
淫魔の精液が口に注がれれば注がれるほど、身体の体温が熱く、腹が燃えるように熱くなってゆく。
両胸の突起を責めていた淫魔たちの熱い手や舌の動きも激しくなり、手に握っている剛直からも熱い先走りがどんどん放出されてゆく。

（ううっ！もう、どこもかしこもっ・・・！感じすぎて、気持ち・・・よすぎてっ・・・）

「んんんっ！ぐっ、ぷはっ！ぁぁぁぁ・・・っ！あああああああ！」

飲み終えたと同時に口を離され、同時に自身で絶頂の白液を飛ばし、両胸で同時絶頂し、掴む両手の剛直から一斉に淫魔の精液が放たれた。

「うあぁぁっ！熱、あっ・・・つ・・・！ああ、ぁぁぁ・・・・・・っ！」

髪で快感を得ていた一人の淫魔が、その不浄を鬼灯の美貌に振りかけてゆく。

一斉に身体中を淫魔の精液で汚され、強い催淫効果を持った粘液は鬼灯の肌を快感に濡れさせ、甘美に震えさせてゆく。

「ううぅっ・・・あっ・・・ぁぁ・・・あ・・・・あ・・・・」

身体中に浴びせられた精液が皮膚に染み入り、鬼灯の身体を熱に浮かされたかのように燃え上がらせ、体中を激悦でヒクつかせている。

端正な美貌は不浄の淫液にまみれ、白い穢れない肢体にもトロトロと粘液がこぼれ落ちている。
ようやく鬼灯の中に熱を放った釘打ち器官を持った淫魔が、身を体内から引き揚げた。

「あうぅっ・・・」

引き抜く瞬間にも軽い絶頂を感じ、汚されつくされた鬼灯が、力なく寝台の上に身体を投げ出している。

その姿は、媚びる仕草は一切ないが、被虐の彩に染め上げられ、これ以上ないほどに打ちのめされた快楽でで表情をゆがめさせた美貌が息をのむほどに扇情的だった。体中にかけられた不浄の淫液が白い身体をあちこちと染め、滑らかな皮膚を滑ってシーツに垂れ落ちる情景は

欲望を放ったばかりだというのに、周囲の淫魔たちは再び劣情がわきあがってくるのを止められず、再び鬼灯の身体へと手や舌を伸ばしてゆく。

「次は、俺が犯してやるぜ・・・」

そう言って、先ほどまで口で奉仕させていた数珠状の剛直を持った淫魔が、鬼灯の腰を抱きかかえる。

淫魔の性欲は途切れる事を知らない。

そして、その欲望を一身に受ける鬼灯は、与えられる快感に耐えられる精神を幸か不幸か持ち合わせている。

いっそ快楽に狂ってしまえば、屈辱も悔しさも感じないのというのに。

「あっ・・・あ、あああぁぁぁ・・・・・・っ！」

チュプ・・・と淫猥な音をたてて、次の熱が鬼灯の身体を犯す。

今度の淫具は岩のように硬く、そのまま強引に鬼灯の体内へ押し入ってくる。

「あっ！ああっ！はぁ、んぐうううっ！」

一気に中ほどまで差し込むと、淫魔は鬼灯の身体を軽々と回してうつぶせにさせ、そのまま腕の中へ鬼灯の白い身体を抱え込み、座位の格好になってそのまま根元まで貫いた。

「あっ！はあぁぁ！あ、あああああ！」

硬くたくましい剛直が鬼灯の内部を侵略し、その異物感と確かに感じる快感に、鬼灯が声を上げた。

「激しくいくぞ」

「・・・・・・・・っ！」

鬼灯が振り返って抗議の言葉を紡ぐより先に、淫魔はひざ裏に手を添え、鬼灯の身体を一気に持ち上げ、上へ引き上げてガチガチの硬直を引き抜いた。

「あああああぁぁぁっ！」

※続きは製品版でお楽しみください※